オオイタデジタルブック

大分合同新聞社

大分合同新聞

渡辺克己著

第二十二章●南大分かいわい①

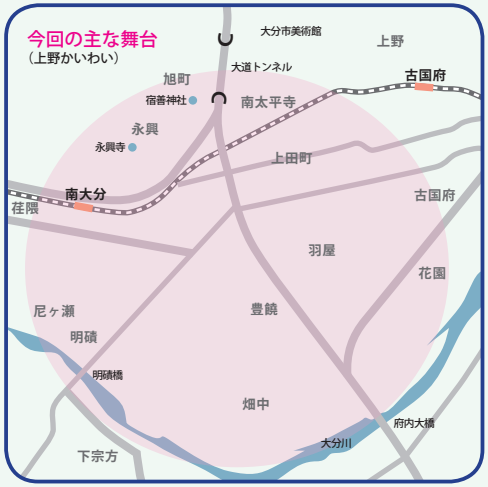
改訂1版：2008年1月15日発行

Next

第二十二章●南大分かいわい①

【写真】生まれ変わる南大分一帯
手前は明磧橋　昭和三十八（一九六三）年

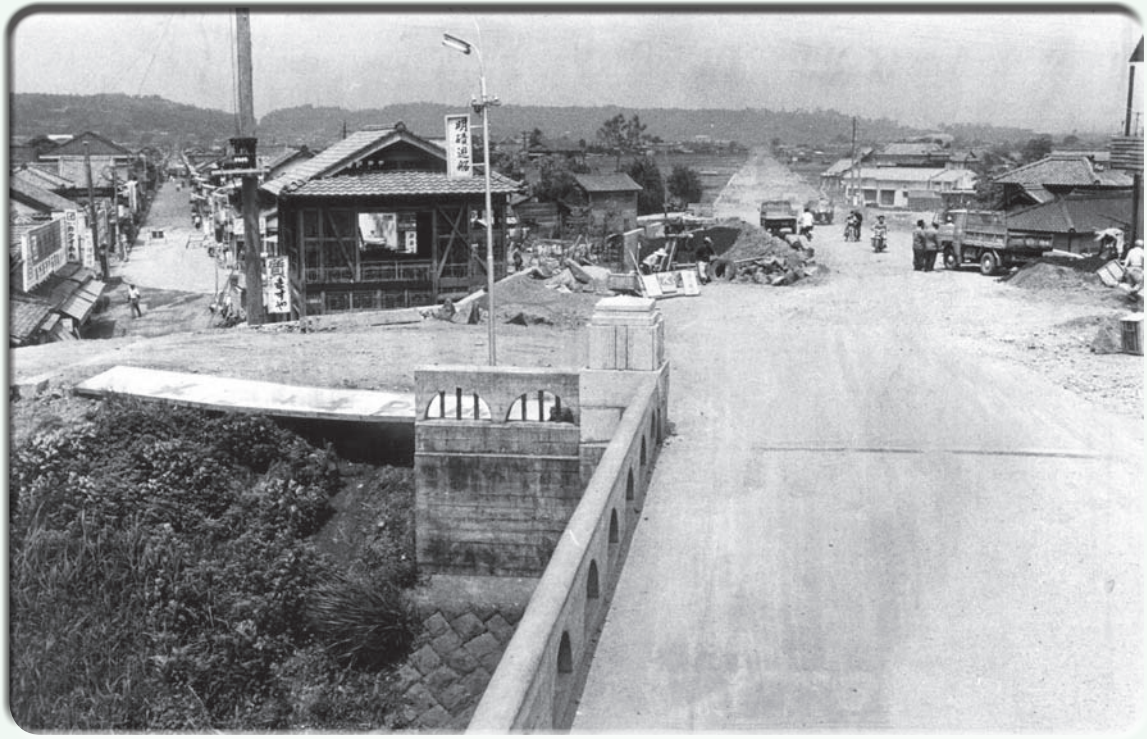
・眠りからさめて
・美しい為朝伝説
・板橋と鎮台さん
・明磧商店街誕生
・呉服屋盛衰記
・珍商売往来
・大分川の暴力
・ゴザ密輸事件
・衰えた青表織り
・盆綱引き
・リョウゴ地名考
・ヨクジ山の市長屋敷
・宿善さま由来
・破壊された古墳群
奥付け／デジタルブックについて



発刊に当たって

▽この電子ブック「大分今昔」は昭和 37（1962）年 11 月から翌 38（1963）年 12 月末まで、1 年 2 カ月にわたり大分合同新聞に 295 回連載され、連載から 20 年後の昭和 58（1983）年大分合同新聞文化センターで書籍として出版されたものを、電子ブックとして再編集したものです。したがって、文中の「現在」とか「いま」というのは昭和 37、8（1962 ～ 63）年当時のことです。

▽使われている町名も、その後、街区制の変更によって連載当時とは変わっており、その場所を知る手がかりになる建物も、いまでは移転したり、なくなったりしているものがあります。このため、おもなものは各章の終わりに「注」として、昭和 58（1983）年現在の町名、場所を説明し、わかりやすくしています。



生まれ変わる南大分一帯、手前は明積橋　昭和 38(1963) 年

眠りからさめて

かつて南大分から市の中心部にはいってくる重要交通路だった大道峠と、それに通ずる家並みは、まるで世間のけん（喧）騒から置き忘れられたように閑寂となってしまった。昭和三十年に大道トンネルが開通してからのことだが、もうずいぶん遠い昔から、そうだ荷車が息を切らして坂道を登っていた明治のころから、そのままなんの変化もなかったような、そんなにおいをただよわせた、ひなびたたたずまいなのだ。

それは大道トンネルができる前とあととの、南大分の発展の速度が段違いに違っているからなのだろう。ことに最近の南大分の変容ぶりはどうだ。先日自転車を押して、汗をふきふき峠越えをしてみたが旭町の宿善神社に立ち寄って南大分を見おろしたとき「ほう」と感嘆の声をあげてしまった。

田畑をつぶして新しい道路が縦横に建設され、緑をおしのけるように色とりどりの屋根が田園をつづって、新興南大分のいぶきを伝えている。そして東の方には工場の大きな建て物が点々と根をおろしているのだ。歴史をさかのぼると、南大分かいわいは、豊後でまっ先に開けたところなのだ。古事記にみえる大分君（オオキタノキミ）という豪族が豊後を統治していた日本民族のあけぼの時代から南大分はその中心であったとみられる。

そして大化の改新によって、古い国造（クニノミヤツコ）制が終わり、新たな国郡制によって、国司が下降し、いわゆる国府時代になると、南大分ははっきり豊後統治の本拠地として繁栄したのである。それは大友氏の統治時代、町の中心がいまの

元町かいわいに移るまで、約四百数十年の間続いた。

その後は、府内の町に置き去りにされたまま、伝説と遺跡の地として、閑寂な農村の眠りにはいったのだ。

まことに長い長い眠りだった。それがいま、新しい大分建設の呼び声に目ざめさせられたのである。

南大分一帯を荏隈郷と呼び、いまの古国府に国司の政庁が置かれていた時代、南大分の地勢はどんなだったろうか。

大分川は現在の荏隈のあたりで鉄道線路の南側を流れ、奥田、豊饒の中心を通って上野台地の東端、竜ケ鼻すれすれに深いふちをなして流れていたようだ。そして日ごろはおだやかに耕地に水を与えていた流れが、しばしば狂奔して家を流し、人畜をのんだことだろう。

しかし、北になだらかな丘陵を背おって南に開けたこの土地は、国府所在地としては君子南面の思想にもかない、最適の地として、愛着を持たれていたのだ。大分市史に渡辺澄夫分大教授は、古国府の感想をこう書いている。

「はるか北方には上野原、庄ノ原台地、四極山、東には東大分及び滝尾碇山、南には霊山、本宮山の連山、西には大竜、烏帽子、由布、鶴見の山々がひときわ高くそびえ、まことに青がき山にもれる国の最中（もなか）なるかなの感を深くし、今さらながら一種荘厳の気にうたれた」。

美しい為朝伝説

堀り切り峠を越えて、南大分にはいった肥後街道は、旭町の

先から斜めに左に折れてくだり、南大分小、中学校の間の道を抜け、さらに学校のちょっと先から右に曲がって、田畑の間をまっすぐに大分川の宮ケ瀬につき当たる道。あれが旧街道だった。

先日、この旧街道をたどってみたが、新しい都市計画による新道が、あすの都市づくりの夢をはらんで幾筋も交錯しているので、どの道を行ったらよいか、なんども畑に働いている老人に声をかけねばならなかった。

旧街道は畑中と奥田の境のところから、大分川の宮ケ瀬を渡り、向こう岸は下宗方。あそこから稙田の雄城の台の東を回って奥へ延びていたのだ。

いまは流れが変わっているが、この宮ケ瀬と明磧の西の尼ケ瀬とは、美しい伝説にいろどられた瀬であった。

昔、源為朝が九州征伐のため豊後にくだって、稙田の雄城の台に城を築いた。豪勇の為朝は心やさしい一面があって、伴ってきた母を永興の上に居館を築いて住まわせた。これを尼ケ城と呼んだ。為朝はよく川を渡って母のごきげんうかがいに訪れた。母もまた川を渡って雄城の台に為朝をたずねて慰めのことばをかけた。母が渡った瀬を尼ケ瀬、為朝が渡った瀬を宮ケ瀬と人々はいい伝えた、というのである。各地にある為朝伝説の中では、これは母と子の暖かさに包まれた雄大さを持っている珍しいものの一つだ。

宮ケ瀬には板橋がかかっていた。もちろん大水でしばしば流された。流されると、橋ができるまでは渡し舟が往来していた。

「あの板橋をはさんで、畑中のこどもと、下宗方のこどもが

ケンカをしたものだそうじゃ。悪口のかけあいと、川原の石の投げあいじゃったということじゃ」

土地の老人が、その父親から聞いたという話をしてくれた。

昔のこどもは、集団となって他地区のこどもとケンカをすることが盛んだった。他地区と感情的にどうという不仲ではないのに、地区の境や川原をはさんでする集団のケンカは、地区の排他性に起因するのだろうが、それは地区内の団結を強める一種の荒々しいスポーツのようなものでもあったのだ。

宮ケ瀬の石合戦もそういうものだったのだろうが、明治十八年ごろ街道が明確に移って、畑中と下宗方との往来がとだえてから、自然にケンカもなくなった。

板橋と鎮台さん

旧肥後街道の思い出の中で、まず古老が語ってくれるのは、西南戦争のさいの官軍の大分進軍のことだ。

旧肥後街道のころは、まだ荷馬車というものはなく、馬の背に荷を積んで、奥地から大分にやってくるのがほとんどだった。それが宮ケ瀬の板橋をコトコト踏んで渡った。奥田の河野勘吾さんの家は昔庄屋で、この宮ケ瀬の渡しの「渡し守り」を担当していたという。それで府内藩から発行された「渡し守り」の許可証ともいうべき木札があったそうだが、私が訪問したときに捜してくれたが、見つからなかった。

とにかく、奥地から馬の背や人の肩をたよりに荷を運ぶ人々が板橋を渡ってくるていどの、まことにのんびりした街道だ。

その街道を、みたこともない官軍が、ぞくぞくと板橋を踏んで大分の町へと進軍していったのだから、南大分かいわいの人々はびっくりした。と同時にいくらか安心感を持った。

西郷軍が、いまにも攻めこんできて、そのあたりは血なまぐさい戦場になるのではないかと不安な気持ちにおおわれていたときだ。

「鎮台がやってきた、というので、みんなぞろぞろ街道すじまで見物にいったそうだ。鉄砲をかついだ、洋服の鎮台さんが珍しかったそうだ」

と畑中の秦節平さんが話していた。節平さんはことし八十五歳、こどものころは兵隊さんのことを鎮台さんといっていたのである。

この板橋をガラガラガラと、車輪の音も高く人力車が渡ってきて、大分の町へ走り去った。南大分の人が人力車というものを見たのは、これが初めてだった。

革の胴には、竜かなにかの絵が描いてある豪勢なもので、鎮台の上官らしい人が乗っていた。それを二人引きで、あの石ころのいなか道を矢のようにつっ走った。そのころ人力車のことを「大早（おおはや）」と呼んでいたそうだ。

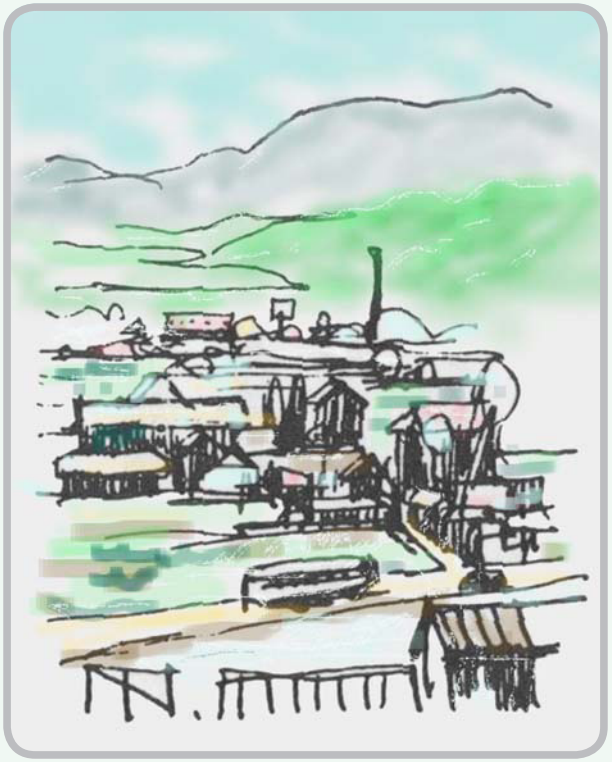
乗っていた人はだれかわからないが、東京から桧垣権少警視が四百人の巡査を引率して大分守備に乗り込んだと記録にあるから、あるいはこの人かもしれない。あるいは小倉から陸軍別動隊第一中隊が来援し、警視庁兵と合流して竹田の岡城を占領した薩軍を迎えうつべく今市村に進軍したそうだから、小倉軍の上級将校だったかもしれない。

明磧商店街誕生

旧肥後街道が廃止されて、現在の明磧橋に通じる県道ができたのは明治十八年ごろ。最初、旧街道を拡張して県道にする予定だったらしいが、南大分側の畑中、奥田、稙田側の下宗方などの沿道に田畑を持っている農家が大反対をした。道路拡張で田畑をつぶされることをきらったのだ。

県ではやむなく計画を変更して、明磧から上宗方に通じる現在の路線をしいた。そのとき木造の明磧橋もでき、稙田の雄城の台の掘り割りもできた。

明磧という名称は、そののちに生まれたものだ。川向こうの上宗方に大明神がまつってあって、その付近の川原を「明（みょう）がわら」と呼んでいた。そこに橋ができたので、その名をとっ



宿善神社から望む（挿絵：田中 昇）

て橋の名とした。だから実際は「みょうがわら橋」であるはずだ。ところが「明磧」と漢字にしてみると「あけがわら」と呼んだ方が、重箱読みでなく自然であるし、ことばもきれいだ。それでだれいうとなく現在のように「あけがわら」が通り名となった。しかも橋の名にちなんで、南大分側を「明磧」と呼びならし、ついに町名にまでなってしまったのである。それまではあそこは奥小路村の蛇堀（じゃぼり）という地名だった。稙田側の名を南大分がとったかっこうだ。

堀り切り峠から旭町、三ケ田町、田中、明磧と広い県道が走ったが、それは田畑の中を赤土とジャリの道がぶあいそうに長々と横たわっているにすぎなかった。

これが南大分の心臓部になろうとは、だれも想像しなかったことだ。

この県道ぞいに、掛け小屋風の小店が、ぽつぽつ建ちはじめたのは、だいぶあとのことである。

奥地から荷だ（駄）を引いて大分の町に往来する人を相手に呉服やあら物、農具などをひさぎ、あるいは馬ていを入れる金ぐつ屋、煮売り屋のよしずを張る店など、みんな細々とした小あきない。

これらの人は、南大分一帯、あるいは稙田方面の農家の二男三男が、家に居てわずかの田畑を食いつぶすよりも、小さな店でも出して独立しようと発心してやってきたものが大部分だった。

当時、あきないの地の利のいい場所は、明磧橋を渡ってすぐのところだった。買いものに出てきたものは、ここで簡単なも

のなら用を足して帰れるし、大分の町に産物を運んだものは、帰途に橋のたもとでひと休みしたついでに買いものをして帰る。だから商店街としての発展は、明磧の方が先だった。

明磧に商店がとびとびながら軒を並べ始めたころ、田中方面はまだ二、三軒の農家があっただけで、三軒家と呼んでいた。

呉服屋盛衰記

明治年代、明磧に店を張った呉服屋は、茶屋、あづまや、藤屋の三軒だった。当時は店売りだけではあきないにならないので、主人が大ふろしきに包んだ反物を肩に、奥地の村々を回る行商にも力を入れなければならなかった。

茶屋呉服店は、のちに三ケ田町に店を移したが、茶屋の幸フクさんといえば南大分かいわいで知らない人はない。桃園の三ツ川から出た人で、夫君荒太郎さんを助けて呉服行商に骨身をけずって財を築いた。お金持ちになったというだけならただの成功者にすぎないが、汗で築いた財をおしげもなく公共のために投げだしている。きもったまの大きい、えらい婦人だった。中でも大きな仕事は、南大分小学校付属幼稚園の設立と、私立城南女学校（現城南高校）の創立だった。

大正十四年、荒太郎さんがなくなった年のこと、南大分小学校にひょっこり現われたフクさんが、「私の孫も幼稚園にはいる年になったが、南大分に幼稚園がない。お金を寄付しますから建ててください」と、平岡一策校長に相談した。建設資金に一万円出すという。当時の一万円といえば大きな金だ。驚いた

平岡校長は、フクさんを伴って、時の大分市長三浦数平さんに会った。「ばあさん、そりゃほんとか」と市長も最初は本気にしなかったそうだ。

三浦数平さんの強力な後援者に幸フクさんがなったのは、このころからだった。三浦数平さんが代議士に立候補したさい、その選挙資金はフクさんのふところから相当出たということだ。

次にフクさんが城南女学校を建てたのが昭和二年。周辺部の女子教育が恵まれていないことをなげいて、私立女学校設立を思いたち、南大分小学校の講堂を仮校舎にして発足した。そして翌年私財六万円を投げ出し、校地はフクさんの養子の八郎さんが寄付して現在の校舎ができあがった。初代校長には当時大分市視学だった小原恵三さんを迎えた。

フクさんは昭和二十九年に八十五歳でなくなったが、茶屋呉服店は、三代目によっていまなお三ケ田町でしにせののれんを張っている。

あづまや呉服店は畑中から秦栄五郎さんが出てきて始め、現在は二代目の直彦さんが明磧橋のすぐ手前で昔ながらののれんを守っており、孫の慶徳さんが本町二丁目に進出して洋品店をやっている。

藤尾呉服店は早く消えてしまってその跡もない。

南大分は昔のおもかげがしだいになくなるほど発展への道を急いでいるが、発展すればするほど、交通の便がよくなり、呉服のようなあきないは中心部にとられてしまう。古いのれんも苦しくなる一方だと秦直彦さんがこぼしていた。

珍商売往来

明磧には竹のステッキを作る珍しい家内工業があった。これを根節（ねふし）製造といっていたようだ。いまどき、竹のステッキなど使用する者はいないが、明治ごろはちょっとハイカラな持ちものだった。

植田や賀来など、大分川ぞいには竹やぶが多かった。その竹やぶから掘りだす、節の多い竹の根を加工し、みがきをかけると、しゃれたステッキができあがる。

滋賀県人の大久保栄さん、南大分の人で町田綱吉さんなどが根節製造工場をもって、製品は国内需要はもちろん、神戸の輸出業者を経て外国にも積み出していた。だから植田あたりの農家の人は、竹の根掘りがいい副業になっていた。

しかしステッキの好みというものは変遷するものだ。それに竹の根のいいものも少なくなって、大正年代に工場をとじた。

明磧橋のたもとに島田まつさんの経営する橋本屋という煮売り屋があったことも南大分や植田かいわいの、七、八十歳の老人ならなつかしい思い出だろう。

橋本屋は、煮売り屋といっても赤ちょうちんの方で、いつも三、四人の女が首を白く塗ってこびを売っていた。

赤ちょうちんは、やはり明治年代に、東大分の鶴羽橋のたもとにもあった。明磧橋といい鶴羽橋といい、周辺部から大分の町にはいるとっつきの橋のたもとに赤ちょうちんがあったのはおもしろい。

大分近郊の農村の若いしは、しょっぱなから遊廓にとびこむ

のはちょっとこわい。そこで、町の入り口の心やすい赤ちょうちんでトレーニングをして、自信ができてからカンタンに繰り込むという順序だったのだろう。

もうひとつ明磧で思い出すのは、大正のなかごろ、賀来の市の祭りのさいに、馬が引く屋形船が出現したことだ。

いま明磧で土建業をやっている河野組の先代河野運平さんが考案した珍商売だった。明磧から賀来まで土手ぞいに屋形船を通すために、川の浅いところは砂を上げるなどの工事までやって、この楽しい商売のフタをあけたものだ。

馬にもしゃれた衣装をきせ、馬子は陣ばおりといういでたち。この馬に引き綱をつけて、屋形船につなぎ、土手をとことこと走らせる趣向だ。船には船頭がふたりついて長いサオであやつりながら賀来までのぼってゆく。船の乗り場には酒さかなを売る店を出していたから、いっこん傾けながら風流な賀来の市参りを楽しんだわけだ。

いま西新町で盛大にやっている食料品卸し店玉屋は、先代佐藤滝蔵さんが大正初年に東稙田から出てきて、明磧のいまの新玉屋のところで食料品小売り店を開いたのが起こり。滝蔵さんのむすこの太亮さんがこれを大いに拡張、昭和二十三年に西新町に進出し今日の大をなした。

大分川の暴力

大分川を大きな帆掛け船が海からのぼってきたことは東新町かいわいの項でも書いたが、それほど大分川は深かったのだ。

しかしその帆掛け船も明磧止まりだった。あれから上流は浅い瀬がところどころあって、大型の船は進めなかったし、むりして船をやる必要もなかったのだ。

帆掛け船の積み荷は、津久見あたりから持ち込む石灰が多かった。石灰は土木建築や、田畑にすきこむために農家の需要があった。明磧におろされた石灰は南大分かいわいはもちろん、奥地の農家が、馬の背で運び去った。

大分川は大水が出るたびに、尼ケ瀬、奥田、畑中、古国府一帯を水びたしにしたものだ。いまのようなりっぱな土手などなかったのだから、川の暴力にたいしては、まったくお手上げのありさま。だからあのあたりの古い家は、たいてい床が高い。そういう消極的な自衛しか手段はなかったのだ。

中でも明治二十六年の水害が最もひどかった。明磧橋ぎわの土手が決壊して、どっと水がなだれこんだ。そのときのもようを記した「大分県水害誌」によると、

「荏隈村―明磧橋は長さ四十二間余、近年巨額の費用をもって架設したるものなりしが、水勢激至して轟然潰亡せり。しかして近傍の民家浸水ほとんど軒端を洗い、わずかに舟いかだの便により人命を救助……」

「豊府村―激流山岳のごとく本村の中央を貫流して四面にはんらんし、畑中、豊饒、羽屋、古国府等各地の人家おおむね浸水せざるはなく、高きは床上七尺以上に及べり。当日の水勢激甚なりしため居民わずかに身をもってのがれ……」といったありさま。荏隈村では水死者七人を出している。

大水のたびに流域も変動したが、近世は、だいたい現在の流

れを維持しているようだ。しかし尼ケ瀬には、現在も土地台帳に田畑として記載されているものが、実際は大分川の水の底というものもあり、耕作地が川向こう稙田側となったために、舟で仕事に出かけたこともつい近年まであったそうだ。

伝説の尼ケ城の尼公が為朝に会うために「尼ケ瀬」の浅瀬を渡るとき、川中の石に腰かけてひと休みしたという大きな石が、現在尼ケ瀬の秦善市さん方の庭石になって残っている。この石はもと上村の田の中にあったのだそうで、その地を大石と呼んでいた。現在の大石町がそれに当たる。大昔の大分川の流域は、あのあたりにあったことを語るものだ。

ゴザ密輸事件

昔は大分川をへだてて、こちら側は府内領、川向こう稙田は臼杵領だった。川を境に支配者が違うのだから不便なこともあり、おもしろいこともあったようだ。

年寄りが父祖からきいた話として茶飲み話にされているのに、七島むしろの密輸事件というのがある。

七島むしろは、天保の改革で府内藩が専売制をしいて、自由取り引きを禁じていたのだが、生産者である農民は、これを不満として、ちょいちょい横流しをしていた。

南大分は府内での七島むしろの主産地だったから、横流しもひんぱんだ。きびしく取り締まっていたがききめがないため、ついに羽屋村の首謀者をつかまえて入ろう（牢）させたことがあるほどだ。

この「ゴザの横流し」の抜け穴が大分川だった。稙田側の仲買い人としめしあわせて、月のない夜、船に山と積んで向こう岸に渡すぐらいわけのないことだ。

つい近年まで、川岸は深いヤブがたくさんあった。あのヤブを利用すれば、密輸の絶好の拠点となったことだろう。利欲に抜け目のない仲買人を中心に、農民たちがヤミにまぎれてヤブ陰にゴザを持ち寄り、すばやく取り引きすればＯＫだ。

しかし、取り締まり側もさるものだ。密輸の拠点をかぎ出して、持ち寄ったゴザを一網打尽に押えることもしばしばであった。そこで、密輸側と、取り締まりの藩役人との追いつ追われつの秘術が尽くされた。

ところが、押収したゴザを、藩役人が横領して私腹を肥やしていることを農民たちがかぎだした。腹が立つが、自分たちも、悪いことをしているのだから、表ざたにもされない。

そこで、日ごろの取り締まりにたいするしかえしもかねて、不正役人をこらしめてやろうということになった。

ある夜、わざと取り締まりの目にかかりやすいように、密輸の船をヤブ陰からこぎ出した。これを見つけた役人が「取り締まりのすじあり、船を返せ戻せ」と呼ばわったが、船はそ知らぬ顔でどんどん沖にこぎ進む。

「いうことを聞かぬと、痛い目をみせてやる」とばかり、くだんの役人は大小も着物も岸にぬぎ捨て流れに飛び込んで船を追った。

船に追いついてみると、ゴザは一枚もない。「お役人さん、何事でございますな」と、農民はとぼけた顔をしている。手持

ちぶさたの役人が、岸に泳ぎ帰ってみると、ぬぎ捨てた大小や着物が見つからない。ヤブにかくれていた農民たちが、持ち去ってしまったのだ。

すっぱだかの役人は村の笑いものにされ、ために平素の不正も上役に知れてクビになった。

農民にもホネがあることを示した一例だ。

衰えた青表織り

青表織りは明治から大正にかけては、ほとんど手織りだった。バタン、バタンと歯切れのいいゴザ機（ばた）の音が、南大分かいわいの農家では終日していた。

真夏に七島を収穫し、好天の日をみて川原で干し上げるのだが、にわか雨でも降ろうものならたいへんだ。雨にぬれると変色して品質がおちるのだから、一家総出で納屋に運びこまなければならない。七島は裂いて干して、タテ糸にするイチビを糸によって、さてそれから織り始めるのだが、むし暑い納屋の中で、終日ゴザ機に向かっている苦しみはなみたいていではない。午前中に一枚、午後一枚、夜なべで一枚、これが熟練した人の作業量だ。（現在の機械織りだと最高十枚あげる）

しかし、楽しみがないわけではない。一つの納屋に、近所の娘さんたちがゴザ機を持ち寄って、四、五人がおしゃべりをしながらゴザ織りをすることは、娯楽の少ない当時としては、ささやかな刺激でもあったのだ。村の若いしが、それをねらって話しこみにやってくることもあったし、回ってくる仲買い人な

どから世間話をおもしろおかしく聞かせてもらうこともあった。

「問屋でも、生産者の家をみて回ることがあるのだが、うちのおやじなど、娘さんが数人で織っているところに行くと、ひやかされて帰ってきたものだ」

明磧のゴザ問屋のしにせ一井宅治さんの思い出話である。

一井商店は国東町の富来で代々ゴザ問屋をしていたのだが、明治年代に先代の惣治郎さんが大道町にきて、さらに大正初年に南大分に移った店だ。七島織りのにおいが骨のずいまでしみこんでいる。

南大分に、いまも店を守っているのは、この一井商店と三ケ田町の堤茂明商店の二軒だけ。堤商店は先代の定彦さんが明治年代に石城川から出てきて問屋を始めたのだった。このほか賀来桑太郎、辻宇之助、池田亀喜、佐藤理三郎、阿南乙五郎、若杉徳太郎、坂本彦太郎などの問屋が、明治中期から末にかけて店を出し、青表生産の最盛期は盛んなものだった。

大分市郡の青表生産は、戦前までは十万束の生産をあげていたものだが、いまはせいぜい五万束から六万束。なかでも南大分の衰微はひどく、戦前は一万束を越えていたのが、いまは千束そこそこというありさま。

青表生産は、反収にすると米作よりも収入ははるかにいいらしいが、なにしろ手間がかかる。その労力を計算すると引きあわないかもしれない。それに最近のように農家の人手不足では、手間のかかりすぎるものは敬遠されがちだ。今後ますます生産が落ちるだろう。

盆綱引き

尼ケ瀬の盆綱引きは、珍しい行事だったが、昭和の初めごろ消えてしまった。西福寺の前の道路は、明磧へ向かってほぼ直線にのびている。この道路が綱引きの場所だった。盆の十六日が綱引きの日で、その日が近づくと村の若いしが中心となって、綱作りに多忙をきわめる。綱のシンは川原から切ってきた竹で、これをワラなわにない込み、直径およそ五十センチ、長さ四十メートルにも及ぶ大綱を作りあげるのである。

さて当日の夕方、できあがった巨大な竜のような大綱は道路に長々と横たえられて日暮れを待つ。西福寺の前、いま地区の公民館になっている場所に、天神さま、えびすさま、六地蔵などの石のほこらが立っていたが、これらのほこらが綱引きにつながりがあるのか、大綱は、だいたいこのほこらの前を起点にして、東の方へ置かれた。

日が暮れると、東の方の地区奥田、畑中などから若いしがにぎやかにやってきた。やがてこれら他地区側が東の引き手、尼ケ瀬側が西の引き手となって、掛け声も勇ましく綱引きが始まる。応援をかねた見物人が道の両側にあふれて、たいへんなさわぎだ。勝負はなかなかつかない。尼ケ瀬側は負けると縁起が悪いというので一生懸命である。引きあっているうちに綱が切れる。すると、切れた綱を引きずって他地区側はどんどん逃げる。尼ケ瀬側は、これを取り戻してしまわないと、ムラの馬が病むとか、馬の足が痛むと信じられていてどこまでも追って行って、取り戻して帰る。そして全部の綱を、ほこらの前に、

ヘビがとぐろを巻いたような形に積み上げて、綱引きは終わる。しかしそのあとが楽しみだ。若いしも見物の娘たちも総出で、西福寺の境内で盆踊りを踊りぬくのだ。綱引きの興奮に引き続いての踊りの輪の興奮は、夜を明かして続けられるのだった。

ここの綱引きは、農耕の働き手である馬の健康に結びついているが、元来豊作祈念の年占いの行事で関東以西に散在している行事だという。ところで、朝鮮には、半径数十キロにわたる各地区が東西に分かれて綱引きをする盛大な農村行事が各地にある。雌雄の竜に見立てた四斗ダルほどもある大綱を東西から引き出して結合し、日暮れ後引き合うのだが、勝った方が豊作というので双方非常な熱の入れようだ。

尼ケ瀬一帯は大友以後（と推測される）大分川の流域の移動によってできた、いわば新開地的な土地であること、あの付近は秦姓の一族によってなりたっていること、大綱を竜に見立てているふしがあるなど、あるいは朝鮮の綱引き行事となんらかのつながりがあるのではないかと思ったが、それを裏付ける資料がないからなんともいえない。しかし日本各地のこの行事は中国や朝鮮から古い昔に伝来したものにはちがいなかろう。

とにかく、地方色豊かなあんな楽しい行事が消えてしまったのはおしい。

リョウゴ地名考

堀り切り峠を下ったところから西に曲がって、初瀬井路にそって行く道が、現在の永興道だが、明治ごろの永興道は、もっ

と山寄りの、石がきにそっていたのだそうだ。いまは、わずかにその形跡をとどめているのみで、人家の下になったり畑になっている。

永興をなぜ「リョウゴ」というのか、これは土地の人にもわからない。

この土地に永興寺という寺院が強大な寺領を持ち、大がらんのいらかを連らねていたことは史実に明らかだ。これはいまから千二百年の昔、賀来の国分寺とほとんど同時にできたものといわれ、地方における仏教信仰の中心的存在だったようだが、大友時代、島津軍の来攻のさい焼きはらわれ、廃寺となった。のち焼け残った本尊に修理を加え小堂を建ててまつった。これを釈迦堂と呼び、寺跡を守りつづけてきたが、明治以後は永興寺の名を継いでいる。

そこで、寺名がそのまま地名となって伝わっていることはわかるのだが、それが「リョウゴ」と、なまったわけがはっきりしない。

永興付近は古墳が多い。そこで貴人の墓（陵）を護るムラすなわち「陵護」、あるいは陵（おか＝上野の台地）のうしろに位置するので「陵後」といったのが永興に結びついたなど民間

永興寺

でいわれているがこじつけにすぎない。

調べていたら、仏教語では永を「ヨウ」と読む場合があることがわかった。これは中国または朝鮮読みで永をｙｕｎｇと発音するのと同類だ、ここまでわかるとあとは簡単だ。永興寺はその昔「ヨウコウ寺」あるいは「ヨウゴ寺」と発音していたのではあるまいか。城南高校背後地の小山を大正時代まではヨクジ山と呼んでいたそうだ。これはヨウコウジ山のなまったものにちがいない。そのヨウコウあるいはヨウゴがリョウゴになまるのはわけはない。なお確かめたいと思っていたら、大分大学の富来隆助教授が、豊後図田帳（国府時代の文献）に永興村はヤウゴ村とよむと見えている、と知らせてくれた。これではっきりした。

この村名のもととなった永興寺は、ずいぶん大きかったとみえ、広い地域にわたってモンゼ（門前＝現在永興寺のある土地）とかブグデン（仏具田）オトウ（御塔）の原などの地名が散在している。「一里の釈迦に二里の薬師」ということばを明治ごろまで大分町の年寄りは口にしていた。町から一里に釈迦堂（永興寺）二里に薬師堂（賀来の国分寺）という意味。かつての深い信仰のなごりだ。

ヨクジ山の市長屋敷

上村の悟真寺に若杉直綱という人の碑がある。

上村の農家に生まれ、広瀬淡窓の咸宜園に学び、さらに泉州堺で医者をしていたおじ（叔父）町田元耕について医術をおさ

めたが、勤皇の志があつく幕末の動乱の渦中に自ら身を投じて、長州藩士とともに蛤御門の戦いで戦死した熱血の人だ。

明治四年に親せき知友がはかって、直綱の写真を埋めて建立したのがこの碑だという。大分市史にもこの人の事績を記しているから郷土の人物としては傑出した人だったのだろう。

しかし、郷土の人にとっては、他郷で活躍した人物には親近感が薄い。郷土のために尽くした身近な人物に、より多くの敬慕をささげ、自慢にしたい。それが人情だ。

南大分かいわいでその自慢の人物の最たるものは三浦数平さんと上田保さん。三浦数平さんは田中、上田保さんは畑中の生まれ。そしてふたりとも名市長のほまれが高い。

三浦数平さんは田中の桜井愛造さんの二男に生まれ、後愛知県の三浦貞一さんの長女操（あや）さんと結婚して三浦家をついだ。

大正六年に二代目大分市長となり、十四年まで八年間を大分市政に努めたのち、政友会から立候補して代議士となった。

市長時代に残した大きな仕事の一つは下水道の完成と上水道工事に着手したことだ。しかしそんなことよりも、その豪放で、庶民的な人となりが市民に敬慕されたのだ。大正十三年ごろ、永興の俗にヨクジ山と呼んでいる高台に、三浦市長が、洋風のしょうしゃな住宅を建てた。農家やゴザ問屋など、じみな建て物しかなかった当時の南大分かいわいでは、この建て物は目を奪うばかりの、りっぱなものだった。おまけに高台に建てたのだから、その赤ガワラの洋館は明磧からも望めた。

南大分の人々はこれを「市長屋敷」と呼んでなんとなく誇ら

かな気分にひたっていたものだ。

三浦数平さんは昭和四年に他界したが、死にのぞんで、屋敷を、世話になった茶屋呉服店の幸ふくさんに託し、城南女学校に寄贈した。現在、幸八郎さん（ふくさんの養子）が住んでいるが、建て物は往年の輝きはうせ、周囲におい茂ったヤブの中に沈んでいる。しかし「市長屋敷」の名は、いまも呼び継がれているらしく、その家の現在の姿を見たいと思って先日、近くまで行ってみたら、道ばたの少女も「市長屋敷」の名を知っていた。

畑中出身の上田保さんは現存の人だ。畑中の農家の老人が「傑物上田保」の出世談をいろいろ話してくれたが、そんなことを書いたら、上田保さんがてれくさがるだろう。

宿善さま由来

旭町の背後の丘の中腹に宿善神社という小さなお社がある。きいたことのない神さまだと思ってお参りしてみたら、狭い社地内に元禄年代に奉納した供養碑や、意味ありげな地蔵さまが立ってござった。

お社の下に住んでいる猪原一平さんにたずねたら、宿善さまは、記録はないがたいへん古くからあるほこらだそうだ。明治初年、百姓いっき（一揆）があったさい、旭町一帯を焼き打ちされた。それで町の復興費に当てるため、荒廃していた宿善さまの社地を笹野庄吉さんという人に売った。ところが、買った庄吉さんが社地を牛馬の骨の倉庫にしてよごしたために一家に

不具者が出たりして不幸におちた。また石段をこわして、そこに家を建てた人も不幸に見舞われるなど不吉が続いた。これは宿善さまのたたりにちがいないというので、町内の有志の世話で宿善神社を再建したという因縁話を、一平さんは長々と話してくれた。

たとえ路傍のささやかなほこらでも、そこにほこらが建てられたのには、それ相応の理由がある。そして民衆の信仰にささえられて、ほこらとしての一つの権威が生まれる。さらに民衆との長い生活の歴史をつづるうちに、冷たい石のほこらにも脈々と血が通ってくるのだ。民衆の喜びや悲しみ、あるいは憎しみや訴えが、ほこらのコケむした内部にぎっしりつまっているにちがいない。

このほこらの歴史や権威を無視されたら、ほこらは怒りを表現せずにはおかないだろう。

この一帯は、大分市における人間の生活史の中では、最も古い部類に属する土地だ。ひょうびょうたる有史以前から、この南に向いた台地の斜面には、人間の生活があった。その人々の残した文化は、路傍の石やほこらにもあるはずだ。しかし古代人のものとしてはっきりした形として残っているのは古墳である。このあたりには、明治、大正期まではずいぶんたくさんの古墳が散在していたらしいが、いま完全な形として保存されているのは「弘法穴」だけである。

猪原一平さんが宿善さまの話ついでに、親切に弘法穴まで案内してくれた。

永興の加茂神社あとの西北のヤブの中にそれはあった。露に

ぬれた雑草がガケを登る小道をおおっていて、いくども足をとられてころびながら弘法穴にたどりついた。弘法穴というのは古墳の内部に、いつの時代からか仏像をまつってあるところから、そういい伝えられているのであって、これはほとんど原形をとどめた横穴墳。

ほかにもたくさんの、これと同様の古墳があったらしいが、この台地一帯が開拓されるごとに、それは破壊され、石槨（せきかく）の巨石は石屋などの手によって運び去られていったという。その破壊の手を、弘法穴だけがまぬかれた。内部に仏像をまつって、別の信仰の対象とされてきたからだ。

古いものを保存するのには、信仰と結びつけることが、最も良策だったわけである。

猪原さんの話では、さらにこの奥に平宗清の墓と伝えられるものがあるそうだが、ヤブが深くてそこまでは行けなかった。

破壊された古墳群

永興付近を歩くと、路傍の墓碑がよく目につく。それがいずれもりっぱで巨大で、ふんだんに石材を使っているからだ。なるほど、かつて永興石の名をはせた石材の産地だけのことはあると、いまさらのように感を深くする。

永興一帯の台地が古墳群に占められ、それに使用された石槨（せきかく）がいずれも巨大な岩石であったということはここらあたりが古代人の住居地として適地であり、豪族の支配下にあったというほかに、墳墓構築に必要な石材が、たやすく手に

入る墓域の適地とされていたことを語るものだ。

それにしても、あの巨大な岩石を、道路も不完全な坂を運び上げ、あるいは運びおろしたわけだが、どのようにして動かしたものだろうか。この地に君臨していた豪族が領民を意のままに使ったことは想像されるが、ある程度の物理学的頭脳と、用具がなければ巨石を動かすことは不可能だ。

永興の井路のそばに、直径一メートル半もあろうかと思われる円形の珍しい碑石がつっ立っている。明治年代、この地で酒屋をしていた首藤円平さんの碑だ。

この大きな碑石は、現在城南団地が造成されつつある付近にあった古墳の上部の覆石を運び出して使用したものである。円平さんは酒屋のほかにバクロウ（馬の売買人）をしたり、葬式のさい使う造花つくりがじょうずで、村内の人々に作り方を伝授したりの活動家で、村のためにも努めた人らしい。それで、この石を運び出すときは、村中総出の奉仕で、赤や黄のはち巻きをしめ、石にかけた太い綱を引っぱったそうだ。明治の末ごろの話である。古墳時代もこれと似たようなことをやったのだろうか。

ところで古墳の覆石の方は、こうして早々と円平さんの碑となったが、底石の方は数年前に運び出され、城南神社の創建記念碑となって境内に立っている。

申しぶんのない利用のされ方だが、古墳が破壊されたことはかえすがえす惜しい。あの古墳のあった土地は「石びつ」という地名がついているそうだから、よほどりっぱな古墳だったにちがいない。

やはり明治の末ごろ、丸山の下の通称サブ山と呼んでいる台地で、りっぱな一枚岩を石屋が利用するつもりで動かしたら、これが古墳の覆石だった。発掘すると中からたくさんの刀剣類などの副葬品が出てきた。これを聞いて師範学校の先生がやってきて、研究したいからといって副葬品はそっくり持って行ったそうだ。「なんという先生だったか、自分はこどものころだったのでおぼえていない」と、古老が話していた。

とにかく、永興一帯は古墳がやたらにあったものらしい。年寄りの話をきいていると、あそこにもここにもと記憶を呼びおこしてくれるが、その価値を知らなかった明治、大正期の土地の人が、ほとんど破壊してしまい、貴重な副葬品も散逸した。この土地が永興石の産地であり、石屋が多かったことも、古墳の破壊を早める大きな原因ともなっている。当時市内のりっぱな家の普請には、永興の古墳の巨石を、たたき割って土台石にしたものが多いそうだ。

土地の人は何も知らないからしかたがないが、当時の町役場などは、このような文化財や遺跡の管理にどんな感覚を持っていたのだろうか。がんらい役人なんてものは文化財音痴なものだが…。

【改訂履歴】

二〇〇七年一月十五日

正　生まれ変わる南大分一帯、手前は明磧橋

昭和三十八（一九六三）年

誤　大正末ごろの南大分。県立農事試験場付近

オオイタデジタルブック

オオイタデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環です。

NAN-NAN では、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公開します。そして、読者からの指摘・追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたいと願っています。情報があれば、ぜひ NAN-NAN 事務局にお寄せください。

NAN-NAN では、この「大分今昔」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック！！！

大分合同新聞社　NAN-NAN　別府大学

著者略歴◇渡辺 克己

大分県大分市佐賀関町木佐上出身。大正二年生まれ。朝鮮京城で新聞記者。終戦で引き揚げ、大分合同新聞記者。こども新聞、学芸部等の部長を経て調査部長を最後に昭和四十三年定年退職。昭和二十七年から同四十三年まで大分市教育委員、昭和四十三年から同四十八年まで民生児童委員。

郷土史を研究し「大分今昔」「豊後のまがい物散歩」「国東古寺巡礼」「忠直卿狂乱始末」「真説・山弥長者」「豊後の武将と合戦」「ふるさとの野の仏たち」等の著書。

デジタルブック版「大分今昔」　第二十二章●南大分かいわい①

2008 年 1 月 15 日改訂 1 版発行

筆者　渡辺 克己

挿絵　田中 昇　（着色：佐藤 克治）

編集　大分合同新聞社

制作　川村正敏／別府大学メディア教育・研究センター 地域連携部

発行　NAN-NAN 事務局

〒 870-8605 大分市府内町 3-9-15 大分合同新聞社 総合企画部内

© 大分合同新聞社